

IMF サーベイ

アジアの展望

アジア経済の将来が抱える5つの課題

2014年5月29日



1000年記念を祝うベトナム・ハノイ。経済の成功に向け進むアジア諸国は、様々な課題を抱えている。

(写真： Getty Images)

- 雑誌「F&D」、アジアの持続的成長の実現までの5つのハードルを検証
- 中国のリバランスが、他のアジア途上国の経済的機会に
- アジア地域の多様性と順応性が、持続的成長のカギ

国際通貨基金（IMF）は、雑誌「ファイナンス・アンド・ディベロップメント（F&D）」のなかで、持続的な成長を追求するアジアは、中所得国の罍の克服、制度及びガバナンスの改善、高齢化社会への対応、格差拡大の是正、並びに金融発展の促進という5つのハードルを抱えていると指摘した。

現在の傾向が続くならば、アジア経済は20年以内に米国経済・欧州経済を合わせた規模を追い抜くと考えられ、21世紀はアジアの時代だという声も聞かれる。一方で、IMFの李昌鏞（イ・チャンヨン）アジア太平洋局長は「アジアの未来は明るい」とされるが、その成功は保証されているわけではなく、リスクを押さえ込み成長を確保するための正しい政策ミックスを選択することができるかにかかっている」と述べた。

貧困、中所得国の罍、新しい成長モデル

最新のF&D2014年6月号は、多様な同地域のあらゆる部分が課題を抱えていると指摘している。アジアは、依然として約7億人の貧困層を抱えている。これは、世界の、1日1.25ドル未満の生活水準と定義される貧困層の約65%に当たり、また所得格差は拡大している。アジアの新興市場国・地域は、中所得国から抜け出し先進国・地域入りするという課題を抱えている。またアジアのいくつかの工業国・地域は、成長モデルの転換という難しいプロセスに乗り出した。



見込み以上に中国が減速するならば、アジアの他の国々がその犠牲となろう。日本では、安倍晋三首相の「三本の矢」で構成された経済計画であるアベノミクスに関連した措置が、労働市場や製品市場の構造改革が期待に届かず消費者や投資家の信認の改善につながらないなど、成長の押し上げで見通しほど効果を発揮しない可能性もリスクとして存在する。また、アジア地域の国内外の政治的緊張が、貿易や投資の足かせとなり成長を弱める可能性もある。

以上述べたようなリスクが現実のものとなった場合、アジア地域の前向きなモメンタム（勢い）を、そぐのではなく減速させる可能性が高いだろう。しかし、各国が持続的な成長を追求するなか、より根深い構造的な問題が、アジア地域の国々に一段と困難なハードルを突きつける可能性もある。最新のF&Dは、アジアの展望を様々な角度から検証し、同地域の経済の今そして今後を理解する手がかりを提供しようと試みている。

ブルッキングス研究所のデビッド・ダラー氏は、中国経済の投資から消費へのリバランス（再調整）を検証し、そのシフトのアジア途上国への影響を分析している。中国元の段階的な上昇、農村部・都市部の人口移動の柔軟性の向上、そして地域の成長の原動力によるその他の調整が、観光や製品輸出の拡大などアジアの他の途上国の機会を切り開いている。

道のルール

アジアの繁栄におけるガバナンスの役割を分析した、アジア開発銀行の Shikha Jha と Juzhong Zhuang の両氏は、開発の様々な段階でガバナンスの異なる側面が作用す

ることを突き止めた。特に、成長と政府の実効性及び規制の質というガバナンスの2指標の間の関係が、他の地域と比べアジアでは高くなっている。

アジアの金融の今後を瞥見したIMFのジェームズ・ウォルシュ氏は、アジアの金融システムが成長し複雑さを増し一段と相互関連性が強まっても、機動性を維持し新たな現実に対応できる用意がなければならないと述べた。

マレーシア中央銀行のゼティ・アクタル・アジズ総裁は、アジアの頑健性とアジアがどのように世界の他の地域の金融と経済の移行に対処できるかについて、同氏の見解を明らかにした。同総裁は、アジア各国内及び地域全体にわたる多様性が、アジアの潜在成長力を持続するカギであると述べた。

本F&Dのアジア特集号では、アジアとの統合が進むオーストラリア、韓国の主要食品であるキムチ、また韓国のドラマやボリウッドなどアジア文化の世界進出と文化輸出の経済への影響などを取り上げている。

■ さらに、F&D2014年6月号では、IMFでリサーチャーを務めるアンドレア・ペスカトーリ、ダミアーノ・サンドリ、ジョン・サイモンの3氏が、5年、10年、15年という各期間を検証し、国の債務が中期的な成長を阻害するような明確な点はないと明らかにしている。IMFのエコノミスト、レックス・ゴシュ、マーベシュ・ケレシ、カラランボス・サンガリデスの3氏が、固定為替相場制に明確か否かにかかわらずコミットすることに伴うコストを分析している。また、プラカシュ・ラウンガニ氏が、失業と労働市場に関する先駆的な研究で2010年にノーベル賞を受賞したクリストファー・ピサリデス氏を紹介している。ジャーナル・オブ・エコノミック・パースペクティブのティモシー・テイラー編集長は、経済学とモラルの豊かながらも時に捻じ曲がった関係について掘り下げて議論している。

関連リンク：

[F&D6月号を読む](#)

[アジアの見通し](#)

[アジアの同期化：ブログ](#)

[F&Dフェイスブック](#)